



素敵滅法界彷徨



白谷陽一郎

ソネット01

下弦の光がそそく波の
幽かな音がきこえる
机上のあかりに逆らふやうに
欲する遙かな月の匂ひ

地下にはあらゆる書物の為の空間
白く塗りつぶされた肌の
あふとつに触れる
帰還には何が必要か

半身の女神のまなざし
懊悩にまみれた剣先を冷やし
ページを刻み始める

血管のやうに浮かび
上がる断片
幼子の涙が部屋を満たす

火

「今晚は」
マッチ擦るような
残響の香り

斜陽

月の光のたゆたう水面のように

明滅する葉 葉

斜めからさし

つらぬかれ

露見する

一つの

こう

源

夜半

男は美しく乱打する
夜にそなえ
白昼のパレット散策
丁寧に爪を研ぐ

夜半に降り始める灰
燃えるような
消失と混淆
振り翳す
パレットナイフに映る
回転
氷の塊
そのぬくもりを
灰の音を聴く者
いびつな塊
歯と歯のあいだで

四つ四つにたて
舐めるように砕かれる

果実

薄闇に紛れた果実
影の地中から
荘厳な色を引き上げる

儼支える果実の
表面を覆う
薄皮めくるような
成熟

蜜のように

草叢の
澄んだ球体のような
一粒一粒
カーブに合わせ光をあてる
照射した光は
暗部の房を
やわらかく潤し
夢見から来た
咳を静めてゆく
開口前夜の祈り
それは透過かもしれない
澄み切った空の下
そっと蜜のように
「おはよう」
ひらひら舞う瞬きに

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
挨拶をする

稜線の雪

どこまでも続くような
放射状のそれらと
包まれて滑る
羽根を休め取り外す
山の稜線に
しんしんと降り積もる雪
のようなそれらを
払い除ける日常
向かい合う数数の中心に
新風を吹かせよう
「それらは移り変わる」
雪消行き去り
春風駘蕩
その場所はまるで卵みたいに
新緑の風を孕んでいる

薄氷

春は波紋のように開いて
両手に冬を抱えると
春はざらりと消えていった
（うすごおり）の上を
（うすらい）
（はくひょう）

走る沓
衣の裾を
引き摺りながら歩く
青白い境の人々

夜はいつでも
水中にあって
すべての星座を
解体しようとする

鉛筆を左手に
零下の舌をうちぬき
先端をひたす
僕は夏の星座をしらない

遠景

臯月と唱えて雨をよぶ
カットしたレモンを
枯渴の舌へしぼるように
夜空の星の眺めのように

傘は遠く
音をたててひらいて

湖のほとり
花菖蒲の花弁は
静かに濡れている

雲とわたくし

ゆらゆらと光る海月の映像を
夢中配信する水面下

ブラックに三日月形の砂糖を入れ
かき混ぜる指先で映像を選択
今夜は特別な日でそれは
久方の
苔むす天の雲の都
中央の優しい
巨大噴水に行先を告げ
あかねさす
雲のへりでくつろぐ
紫陽花の
あかむらさきの
咲き誇り
三日月形
の砂糖転げ落ち
シュウウノヨウニ
海へ！海へ！
一口飲んで夢中配信

朝早く起きて気がつく真っ白な
ふわふわしてる雲とわたくし

晩夏

開花の余韻にじむ
祭りの跡の夜空のように
車道は色取り取りの発光
曖昧な輪郭ただよう
人工の街
死角のビルへ！
窓すなわちスクリーン
内部の倦怠
シーツに横たわり
美しい棘の視線を零す
水無月
皎皎と男照らす
晩夏

仮面の表情はおそろしく遅遅とした歩みと共に変わる

仮面の表情はおそろしく遅遅とした歩みと共に変わる

行列は数の増減を繰り返す

無表情から微笑まで仮面の下の黄金の糸は

天上へと続いているのだが

見えない

黄金へ夢の刃物をあてている夜は

歌集

ゆらゆらと光る海月の映像を夢中配信する水面下 「雲とわたくし」より

朝早く起きて気がつく真っ白なふわふわしてる雲とわたくし 「雲とわたくし」より

朝と夜を説明してよと迫られて見せる珈琲にミルク落として

さんさんとグラスにそそぎ眺めてはくれなゐにほふワイン飲み干す ※H 2 5.5.4 発表

オレンジを食す

オレンジの果汁はあふれてにじみゆき画布はふたたび透きとほりたり

けふもまた喰はせてくれてありがたう私の左手見つち箸置く

ざらざらを

すすぎ乾かし

さらさらに

濁点落とす本を愉しむ

なつかしきかをりただよふこのへやで夏の夜のことふと懐かしむ

亜麻色の髪の色音の印象は光かそけき糸遊に似て

永遠の休符にも似た微調整 椅子から指へ流れる序曲

地下室に浮かぶ光の数々は今に游がうたの雪片

秀歌詠む秘訣は力抜くことと聞きてさつそくはひもとほろふ

秀歌読む詠んだ気分で読んでみる俺は斉藤斎藤茂吉

宛て先は、君。移りゆくインク使つて、あいたいあいたい、あいたい、逢ひたい

宛て先は、君。鈍色のインク使つて、あいたいあいたい、あいたい、逢ひたい

この燃える手紙渡せる胸中でたしかにみたの水が差す部屋

朝と夜の何方がわれの見る夢かうつつか振子の先のわれは

射干玉の髪およびもて梳きながら寝息のやうな言霊交はず

細胞のひとつひとつに思ひ増す宇宙の中のまろき天体

腕を組むふたり見守る星月夜 真昼の井戸の底の星影

カーテンや瞼閉ぢぬる奈落にて新月の如き夕映え感ず

羽子板でピンポンしてる僕達はオレンジ色の気持のつけて

あんパンをぱくりわが甘いうまい担当衛星ぐるりと回る

不動なり此処は悟りの境地なり携帯ふるへ驚天動地

張りつめた空気に添はずとくところほり垂るなり無人星にて

「ジンルイノサイコウノゲイジュツハナニ？ドーズ」「ドーレーファーミードーズ」

ここってさ「へ」より「に」のほうがよくない？パスタにソースからめ女子会

あらはるる梅に蒼のあらはるる神超やばい香り含（ふふ）めり

梅の木のつぼみ横目にゆきながら蕾ぞかしとぼくはつぶやく

羽撃きはしぶきのごとき谷渡りうぐひすやうやうしぶき仕舞へり

空蟬の天をふるはす絶唱よ現人の人よ空蟬のひと

薄日さす枝の透き間の彼方よりとろりとろりと蜜の音聞こゆ

見上ぐればひかり渦巻く蜘蛛の糸 神の目で観るそば舞ふ蝶を

嗚呼空に雲がひとつもないなんて現代語訳樋口一葉

うたぶくろあかぬ声音はやくしまる息を凝らして息づかいまで

哀傷歌

日輪の姿かたちもなかりけり吾の眼にうつす日の宮